

SY7-4

**メディア・スマホ依存の現状とその治療
依存症の治療施設の現状と治療**

中山 秀紀

独立行政法人 国立病院機構 久里浜医療センター 精神科

古代よりさまざまなメディア（情報媒体）があるが、時代を追ってより大量に、より正確に、より便利なものになってきている。そして近年より普及しているインターネットは、それまでのメディアと比較にならないほど大量の情報を相互にやりとりできるなど革新的なツールである。特に2010年頃より一般に普及しつつあるスマートフォンはいつでもどこでもインターネット接続が可能であり、現在最強のメディアの一つである。インターネットはそれまでの社会構造を変えるほどの可能性を持っていると考えられる。しかし様々な負の側面があることも知られつつあり、青少年世代を中心とした依存的な使用もその一つである。本邦での中高生を対象としたスクリーニング調査では、概ね数%程度の罹患率であると考えられている。インターネットやゲームの依存的な使用は疾患として考えられるようになりつつあり、DSM-5ではインターネットゲーム障害（Internet Gaming Disorder）の診断基準が発表され、今後発表されるICD-11においても、ゲーム障害（Gaming Disorder）が盛り込まれる予定である。まだ少ないながらも各医療機関でもインターネット依存への取り組みが行われているところもある。しかし診療現場では患者の動機づけや治療導入、その継続に苦慮することも多い。また認知行動療法などの心理療法や、合併精神疾患・発達障害への薬物療法などの有効性の報告があるものの、治療手段もまだ確立されていない。久里浜医療センターでは2011年7月よりネット依存治療研究部門を立ち上げ、インターネット依存者への診療を行っており、今までに1000人以上が訪れている。これらのインターネット依存者に対して通常の外来診療に加え、インターネット依存専門デイケア（集団認知行動療法など）、家族会、心理療法（個人認知行動療法など）、入院治療、そして近隣の中学校への予防啓発教育、ネット依存治療キャンプへの協力等を行っている。当日は久里浜医療センターでの治療的取り組みについての詳細を発表する予定である。